

則天武后「大享昊天樂章」訳註稿（下）

加 藤 聰

本稿は、唐則天武后が昊天祭祀のために制作した樂章歌辞について、校訂と註釈、日本語訳を施すものである。全12首のうち前半6首については、上篇としてすでに「中唐文学会報」第23号(2016年10月、以下「前稿」と略称)に発表している。凡例についてはそれを参照いただきたい。

① 第七

②
罇浮九醞、禮備三周。 そん きゆうらん う れい さんしゆう そな 罇は九醞を浮かべ、礼は三周到に備われり。
陳誠菲奠、契福神猷。 まこと ひてん の ふく しんゆう あ 誠を菲奠に陳べ、福を神猷に契わす。

【校記】

①第七一『唐』作「七」、『全』卷10無し。②罇一『樂』作「罇」、『唐』『全』卷10作「樽」、『全』卷5作「尊」。

【押韻】韻目は『廣韻』による

下平18尤（周・猷）

【註釈】

- 浮一酒器になみなみと満たされる。唐・魏徵等「五郊樂章・赤帝雍和 迎俎」（『樂』卷6・太宗貞觀年間作）に「瓊羞溢俎、玉醴浮觴（瓊羞 俎に溢れ、玉醴觴に浮かぶ）」。唐太宗「春日玄武門宴群臣」（『全唐詩』卷1）に「清尊浮綠醕、雅曲韻朱弦（清尊 綠醕を浮かべ、雅曲 朱弦に韻く）」。
- 九醞一祭祀に用いる釀造酒。『西京雜記』卷1に「漢制、宗廟八月飲酎。用九醞・太牢、皇帝侍祠。以正月旦作酒、八月成。名曰酎、一曰九醞、一名醇酎（漢制には、宗廟にて八月に飲酎す。九醞・太牢を用い、皇帝 侍祠す。正

月旦を以て酒を作り、八月に成る。名は酎と曰い、一に九醞と曰い、一に醇酎と名づく」。後漢・張衡「南都賦」（『文選』巻4）に「酒則九醞甘醴、十句兼清（酒は則ち九醞の甘醴、十句の兼清あり）」。

- 禮備三周一**天帝に対して神酒を三度奉じる。後の第十に見える「三獻已周」と同趣意で、昊天祭祀における「三獻」（初獻・亜獻・終獻）の儀礼をいう。唐・無名氏「享太廟樂章・恭和 撤俎」（『樂』巻10・中宗神龍元年(705)作）に「禮周三獻、樂闋九成（礼は三獻を周くし、樂は九成を闋む）」。なお武周期の親祭では、永昌元年(689)および長寿2年(693)の明堂（万象神宮）祭祀において、前者で太后（武后）・皇帝（睿宗）・太子（李成器）、後者では太后・魏王武承嗣・梁王武三思がそれぞれ三獻を務めた記録が残る（『資治通鑑』巻204および巻205）。江川式部「唐朝祭祀における三獻」（『駿台史学』第129号、2006、35頁）参照。
- 陳誠一**まごころを天にのべささげる。齊・謝超宗「南郊樂歌・昭遠樂 就燎位」（『樂』巻2）に「禮非物備、福唯誠陳（礼は物の備うるに非ず、福は唯だ誠もて陳ぶるにあり）」。北周・庾信「祀圓丘歌・皇夏 飲福酒」（『樂』巻4）に「陳誠惟肅、飲福惟虔（誠を陳ぶるに惟だ肅み、飲福するに惟だ虔む）」。唐武后「明堂樂章・宮音」（『樂』巻5）に「藻奠申誠敬、恭祀表惟馨（藻奠もて誠敬を申べ、恭祀して惟馨を表す）」。
- 菲奠一**ささやかなる供物。先例に乏しい語。唐高宗「祭告孔子廟文」（『全唐文』巻15・乾封元年(666)作）に「聿陳菲奠、用旌無朽（聿に菲奠を陳べ、用て無朽を旌す）」。「菲」は、謙辞で微薄の意。郊廟歌辞では、武后および中宗期の作に用例が集中することが注意される。唐・無名氏「享太廟樂章・誠敬皇后酌獻飲福」（『樂』巻10・中宗神龍元年(705)作）に「顧惟菲質、忝位椒宮（顧みて菲質を惟い、忝くも椒宮に位す）」。また、前稿第四の註釈「**菲德**」に引く武后「大享拜洛樂章・顯和」、および「**禎符**」に引く同「**同・顯和**」参照。
- 契福一**先例を見出せない表現。唐・徐堅「儀坤廟樂章・壽和 昭成皇后室飲福」（『樂』巻11・睿宗景雲2年(711)作）に「於穆清廟、肅雍嚴祀。合福受釐、介

以繁祉ああ（於 穆たる清廟、肅雍として嚴祀す。福を合わせ釐ひもろぎを受け、介おおいにするに繁祉を以てす）、また、唐・無名氏「祀圓丘樂章・壽和 飲福酒」（『樂』卷5・開元11年(723)作）に「上帝來享、介福爰臻。受釐合福、寶祚惟新(上帝來たりて享け、介福 爰こゝに臻る。釐を受けて福を合わし、宝祚 惟れ新たなり)」¹⁾とある。これらがいずれも「飲福酒(神霊からの返杯を受ける儀礼)」の歌辞であり、「契」は「合」と意味が通じるため、ここでも福酒を受けて神霊と通じあう意と解した。武后「享先蠶樂章・潔誠 迎俎」（『樂』卷7・高宗顯慶年間作）に「神其覃有慶、契福永無疆(神 其れ覃あまねく慶 有らしめ、福を契あわすこと永く疆かぎり無し)」²⁾。

- 神猷一神霊(ここでは天帝)の大いなる道、ひいては神霊そのもの。陳・無名氏「太廟舞辭・凱容舞」（『樂』卷9）に「神猷緬邈、清廟斯存(神猷 緬邈として、清廟 斯に存せり)」。

【訳】

樽には旨酒うまざけなみなみと、三度お神酒みたびをたてまつる。
薄き供物に誠をささげ、天より酬いの福たまう。

① 第八

奠璧郊壇昭大禮、	へき こうだん すず たいらい あきら 璧を郊壇に奠めて大礼を昭かにし、
鏘金拊石表虔誠。	かね う いし う けんせい あらわ 金を鏘ち石を拊ちて虔誠を表す。
始奏承雲娛帝賞、	はじ しよううん そう ていしよう よろこ 始めに承雲を奏して帝賞を娛ばせ、
復歌調露暢韶英。	ま ちようろ うた しようえい の 復た調露を歌いて韶英を暢ぶ。

【校記】

①第八—『唐』作「八」、『全』卷10無し。②拊—『旧』作「附」。③虔—『唐』作「睿」。④暢—『唐』作「楊」。⑤英—『旧』作「音」。

【押韻】

下平14清（誠）、同12庚（英）同用。

【註釈】

○奠璧—璧を天帝に薦める。「奠」は、祭事において供える。「璧」については、

前稿第三の註釈「方璧」参照。

- 郊壇—昊天祭祀は、南郊に築いた円壇で執りおこなわれた。『禮記』郊特牲に「郊之祭也、迎長日之至也、大報天而主日也。兆於南郊、就陽位也(郊の祭は、長日の至るを迎うるなり、大いに天に報いて日を主とするなり。南郊に兆するは、陽位に就くなり)」。また、前稿第三の註釈「圓壇」参照。唐・無名氏「祀昊天樂章・雍和 迎俎」(『樂』卷5・中宗景龍3年(709)作)に「郊壇展敬、嚴配因心(郊壇に敬を展べ、嚴配するに因心をもってす)」。
- 大禮—帝王の行う祭祀、ここでは昊天祭祀。『周禮』春官・大宗伯に「治其大禮、詔相王之^{なら}大禮(其の大礼を治い、王の大礼を詔相す)」、その賈公彥疏に「云治其大禮者、謂天地人之鬼神祭禮、王親行之爲大禮(「其の大礼を治い」と云うは、天・地・人の鬼神の祭礼を謂い、王の親ら之れを行うを大礼と爲す)」。齊・謝超宗「南郊樂歌・永至樂 皇帝入壇東門」(『樂』卷2)に「皇德全被、大禮流昌(皇德 全く被い、大礼 流く昌んなり)」。
- 鏘金拊石—金属や石で作られた打楽器(鍾や磬)を打ち鳴らす。祭祀に奏でられる音楽を代表した表現。「鏘」「拊」は、ともに打つ。唐・魏徵等「享太廟樂章・大成舞 元皇帝」(『樂』卷10・太宗貞觀年間作)に「鏘鏘鐘石、載紀鴻勳(鏘鏘たる鐘石、載ち鴻勳を紀せり)」、ただしこの「鏘鏘」は擬声語。前稿第六の註釈「鏘金」参照。また『尚書』舜典に「夔曰、於、予擊石拊石、百獸率舞(夔曰く、於、予 石を撃ち石を拊てば、百獸 率いて舞うと)」、その偽孔伝に「拊、亦擊也。……樂感百獸、使相率而舞、則神人和可知(拊も亦た撃なり。……樂 百獸を感ぜしめて、相い率いて舞わしむれば、則ち神人和すること知る可し)」。唐・魏徵等「五郊樂章・赤帝舒和 送文舞出迎武舞入」(『樂』卷6・太宗貞觀年間作)に「陳觴薦俎歌三獻、拊石縱金會七盤(觴を陳べ俎を薦めて三獻に歌い、石を拊ち金を縱ちて七盤に会す)」。
- 虔誠—つつしみ敬うまごころ。北周・庾信「祀五帝歌・赤帝雲門舞 皇帝初獻」(『樂』卷4)に「朱絃絳鼓磬虔誠、萬物含養各長生(朱絃 絳鼓 虔誠を磬くし、万物 含み養われて各々長生す)」。唐・褚亮等「祭方丘樂章・順和 送神」(『樂』卷6・太宗貞觀年間作)に「神之聽矣、式鑒虔誠(神の聴こしめて、式て虔誠

を鑑みよ)。武后「享先蠶樂章・昭慶 飲福送神」(『樂』卷7・高宗顯慶年間作)に「虔誠資宇内、務本昉黎蒸(虔誠 宇内を資け、務本 黎蒸に昉む)」。

- 承雲—黄帝あるいは顓頊がつくったという楽曲で、別名「雲門」。『楚辭』「遠遊」に「張咸池奏承雲兮、二女御九韶歌(咸池を張りて承雲を奏し、二女御して九韶を歌う)」、その王逸註に「承雲、即雲門。黄帝樂也」。また『呂氏春秋』古樂に「帝顓頊好其音、乃令飛龍作效八風之音、命之曰承雲、以祭上帝(帝顓頊 其の音を好み、乃ち飛龍をして作りて八風の音に效わしめ、之れを命けて承雲と曰い、以て上帝を祭る)」。ここでは、次句の「調露」「韶英」とあわせて、祭祀に奉奏される音楽を象徴する。唐・魏徵等「五郊樂章・青帝舒和 送文舞出迎武舞入」(『樂』卷6・太宗貞觀年間作)に「調露初迎綺春節、承雲遽踐蒼霄馭(調露 初めて迎う綺春の節、承雲 遽に踐ゆ蒼霄の馭)」。唐・褚亮等「祀圓丘樂章・雍和 迎俎」(『樂』卷4・太宗貞觀6年(632)作)に「雲門駭聽、雷鼓鳴空(雲門 聴くものを駭かせ、雷鼓 空に鳴る)」。また後註「調露」に引く、唐・無名氏「朝日樂章・舒和」参照。
- 帝賞—みかど(ここでは天帝)による観賞。梁簡文帝「三日侍宴林光殿曲水詩」(『藝文類聚』卷4・歲時中・三月三日所引)に「芳年留帝賞、應物動天襟(芳年 帝賞を留め、応物 天襟を動かす)」。唐・魏徵等「五郊樂章・黄帝舒和 送文舞出迎武舞入」(『樂』卷6)に「自有雲門符帝賞、猶持雷鼓答天成(自り雲門 有りて帝賞に符うも、猶お雷鼓を持して天成に答う)」。
- 調露—四時の気が調和し万物を育むといわれる音楽。梁・任昉「奉答敕示七夕詩啓」(『文選』卷39)に「寧足以繼想南風、克諧調露(寧ぞ以て継いで南風を想い、克く調露に諧うに足らん)」、その李善註に『樂動聲儀』を引いて「時元氣者、受氣於天、布之於地、以時出入物者也。四時之節、動靜各有分職、不得相越、謂調露之樂也。宋均曰、調露、調和致甘露也、使物茂長之樂也(時に元氣なる者は、氣を天に受け、之れを地に布き、時を以て物に出入する者なり。四時の節の、動靜 各分職 有りて、相い越ゆるを得ざるを、調露の樂と謂うなり。宋均 曰く、調露は、調和して甘露を致し、物をして茂長せしむるの樂なり、と)」。唐・無名氏「朝日樂章・舒和 送文舞出迎武舞入」

『楽』巻6・太宗貞観年間作に「崇牙樹羽延調露、旋宮扣律掩承雲(崇牙樹羽 調露を延べ、旋宮 扣律 承雲を掩う)」。また前註「承雲」に引く、唐・魏徵等「五郊樂章・青帝舒和」参照。

- 韶英一舜あるいは譽がつくった「韶(招)」と、譽がつくった「英(韻)」。いずれも祭祀音楽の象徴として郊廟歌辞に頻見するが、この二曲の並用はまれ。『尚書』益稷に「簫韶九成、鳳皇來儀(簫韶 九成すれば、鳳皇 来たりて儀す)」、その偽孔伝に「韶、舜樂名」。また『呂氏春秋』古樂に「帝譽命咸黒作爲聲歌九韶・六列・六英(帝譽 咸黒に命じて作りて声歌の九韶・六列・六英を爲さしむ)」。梁・沈約「大觀舞歌」(『楽』巻52)に「咸英韶夏、於茲比盛(咸・英・韶・夏、茲に於て比な盛んなり)」。

【訳】

蒼壁を壇に薦めて盛大に天をまつり、
金石を撃ち奏でてはまごころをご覧にいれる。
承雲の樂でみかどのお耳をよろこばせ、
調露や九韶・六英を天高く歌いあげる。

① 第九

荷恩承顧託、執契恭臨撫。	おん こうむ こたく う けい と つし りんぶ 恩を荷りて顧託を承け、契を執りて恭みて臨撫す。
廟略靜邊荒、天兵曜神武。	びょうりやく へんこう しず てんべい しんぶ かがや 廟 略 辺荒を静め、天兵 神武を曜かす。
有載資先化、無爲遵舊矩。	ゆうさい せんか と む い きゆうく したが 有載 先化に資り、無為 旧矩に遵う。
禎符降昊穹、大業光寰宇。	ていふ こうきゆう くだ たいぎょう かんう み 禎符 昊穹より降り、大業 寰宇に光つ。

【校記】

①第九一『唐』作「九」、『全』巻10無し。

【押韻】

上声9麌(撫・武・矩・宇)

【註釈】

- 荷恩一天恩をうける。「荷」は、こうむる・いただく。魏・曹植「上下太后詠表」(『藝文類聚』巻15・后妃部・后妃所引)に「草木荷恩、含氣受潤(草木 恩

を荷り、含気潤いを受く)。北齊・無名氏「明堂樂歌・高明樂 禋獻」（『樂』卷3）に「祀竭其誠、荷天休命（祀りて其の誠を竭くし、天に休命を荷る）。なお以下四句を、武后「享清廟樂章・第八武舞作」（『樂』卷10）は、そのまま用いて一首をなす。

- 顧託**—委託・囑託する。多くは臨終における遺託。梁・任昉「爲齊明帝讓宣城郡公第一表」（『文選』卷38）に「遂荷顧託、導揚末命（遂に顧託を荷い、末命を導揚す）。ここでは第四の「先顧」と同様、先帝の囑託。易姓直前の改元にあたっての、武后「改元載初赦文」（『全唐文』卷96・載初元年(690)作）に「思宏顧託之恩、再闡混元之始（思に顧託の恩を宏め、再び混元の始を闡かんとす）」。
- 執契**—かなめを握る。「契」の原義は、割り符。晋・陸機「演連珠五十首序」（『文選』卷55）に「明君執契、以要克諧之會（明君 契を執り、以て克く諧らぐの会を要す）。ここでは、統治の実権を握ること。唐太宗「執契靜三邊」（『全唐詩』卷1）に「執契靜三邊、持衡臨萬姓（契を執りて三辺を静め、衡を持して万姓に臨む）。唐・無名氏「享太廟樂章・迎神」（『樂』卷10）に「道光執契、化籠提象（道光きて契を執り、化籠いて象を提る）」。
- 臨撫**—民草を慰撫統治する。後漢・蔡邕『獨斷』卷上に「王者臨撫之別名、天子曰兆民、諸侯曰萬民、百乘之家曰百姓（王者が臨撫するところの別名、天子は兆民と曰い、諸侯は万民と曰い、百乗の家は百姓と曰う）。唐・虞世南「左武侯將軍龐參碑序」（『文館詞林』卷453）に「皇上膺圖御歷、臨撫萬方（皇上 図を膺けて歴を御め、万方を臨撫す）」。
- 廟略**—国家の大略、特に軍事面での策謀をいう。「廟謀」「廟算」と同意。「廟」は宗廟で、皇帝統治の象徴。以下二句は、王朝創始における武功をのべる。『晉書』卷34・羊祜傳に「祜受任南夏、思靜其難、外揚王化、內經廟略（祜 任を南夏に受けしより、其の難を静めんことを思い、外に王化を揚げ、内に廟略を経る）。唐・盧照鄰「中和樂九章・歌東軍」（『全唐詩』卷41・高宗總章2年(669)作）に「遐哉廟略、赫矣台臣（遐なるかな廟略、赫たるかな台臣）」。

- 邊荒—荒涼たる辺境地帯、またそこに棲む異民族をも指す。後漢・蔡琰「悲憤詩」其一(『後漢書』列傳卷74・列女傳所引)に「邊荒與華異、人俗少義理(辺荒 華と異なり、人俗 義理少なし)」。唐高祖「即位告天冊文」(『全唐文』卷3・武德元年(618)作)に「大舉義兵、式寧區宇。懲邊荒之辮髮、輯兆庶之離心(大いに義兵を挙げ、式て区宇を寧んず。辺荒の辮髮を懲らしめ、兆庶の離心を輯む)」。あつ
- 天兵—天威かがやく軍隊、天子の兵。前漢・楊雄「長楊賦」(『文選』卷9)に、漢武帝の蛮夷攻略をのべて「夫天兵四臨、幽都先加(夫れ天兵 四に臨み、幽都 先ず加えらる)」、その李善註に「天兵、言兵威之盛如天也(天兵とは、兵威の盛んなること天の如きを言うなり)」。唐・褚遂良「唐太宗文皇帝哀冊文」(『文苑英華』卷835・太宗貞觀23年(649)作)に「天兵電照、月陣風馳。蚩尤遞剪、猘窠成誅(天兵 電のごとく照り、月陣 風のごとく馳す。蚩尤 遞いに剪され、猘窠 成に誅さる)」。なお、武后は聖曆二年(699)太原に「天兵軍」を創設して婁師徳を大総監に任じた(『通典』卷172、『舊唐書』卷93・婁師徳傳)。
- 神武—『周易』繫辭傳上に「古之聰明叡知、神武而不殺者夫(古の聡明 叡知、神武にして殺さざる者か)」とあるのによる。神がかつた武威。晋・傅玄「宗廟歌・文皇帝登歌」(『樂』卷8)に「聰明叡智、聖敬神武(聡明なる叡智、聖敬なる神武)」。唐・無名氏「朝日樂章・舒和 送文舞出迎武舞入」(『樂』卷6・太宗貞觀年間作)に「誕敷懿徳昭神武、載集豐功表睿文(誕に懿徳を敷きて神武を昭らかにし、載ち豊功を集めて睿文を表す)」。すなわ
- 有載—『毛詩』商頌「長發」に「九有有載(九有 載たる有り)」、その鄭玄箋に「九州齊一載然(九州 齊一にして載然たり)」というように、もとは一律・一斉なるさま。後にこの句意から転じて、「九有」すなわち天下の意として用いられる。隋・無名氏「武舞歌」(『樂』卷52)に「聲隆有載、化覃無外(声は有載に隆く、化は無外に覃ぶ)」。たか およ
- 資—よる・たのむ・それを持ちいる。唐・褚亮等「祭方丘樂章・順和 迎神」(『樂』卷6・太宗貞觀年間作)に「萬物資以化、交泰屬昇平(万物 資りて以

て化し、交泰して昇平に属う)。

- 先化—先例の見えない語。ここでは先帝による教化と解した。齊・謝朓「雲祭樂歌・歌黃帝」(『樂』卷3)に「涼燠資成化、群方載厚德(涼燠 成化に資り、群方 厚德を載う)」。北齊・無名氏「明堂樂歌・武德樂 太祖配饗」(『樂』卷3)に「仁加有形、化治無外(仁は有形に加わり、化は無外に治し)」。
- 無爲—為すことなくして治まる。教化徳治の象徴。『論語』衛靈公に「無爲而治者、其舜也與。夫何爲哉(無爲にして治まる者は、其れ舜なるか。夫れ何をか為さんや)」、その何晏集解に「言任官得其人、故無爲而治(言うところは 官を任ずるに其の人を得、故に無爲にして治まる)」。晋・曹毗「江左宗廟歌・歌哀皇帝」(『樂』卷8)に「道尚無爲、治存易簡。化若風行、民猶草偃(道は無爲を尚び、治は易簡を存う。化は風の若く行われ、民は猶ほ草のごとく偃す)」。
- 舊矩—先例の見えない語。「舊典」(『尚書』君牙)や「舊章」(『同』蔡仲之命)と同じく、先帝の遺した規矩典章と解した。宋・謝莊「世祖廟歌・孝武皇帝歌」(『樂』卷8)に「於穆睿考、襲聖承矩(於 穆たる睿考、聖を襲い矩を承く)」。北齊・無名氏「南郊樂歌・皇夏樂 還便殿」(『樂』卷3)に「乃安斯息、欽若舊章(乃ち安んじ斯に息い、欽みて旧章の若くす)」。武后「大享拜洛樂章・徳和 武舞」(『樂』卷6・垂拱4年(688)作)に「崇儒習舊規、偃伯循先旨(儒を崇ぶこと旧規に習い、伯を偃むること先旨に循う)」。
- 禎符—一句は、第四の「禎符萃眇躬」と同趣意。前稿第四註釈「禎符」参照。
- 昊穹—昊天・上帝。前漢・司馬相如「封禪文」(『文選』卷48)に「伊上古之初肇、自昊穹兮生民、歷選列辟、以迄於秦(伊れ上古の初肇、昊穹の民を生じてより、列辟を歴選して、以て秦に迄る)」、その李善註に張揖を引いて「昊穹、春夏天名」。武后「省獄官制」(『文苑英華』卷464・萬歲登封元年(696)作)に、自らの即位と封禪とをのべて「茂祉日繁、殊禎歲集。答昊穹之睠命、順億兆之誠祈。蒼壁靈壇、展嚴禋於上帝(茂祉 日々に繁く、殊禎 歳々に集まる。昊穹の睠命に答え、億兆の誠祈に順う。靈壇に蒼壁し、嚴禋を上帝に展ぶ)」。

- 大業一先帝の偉業。『尚書』盤庚上の「天其永我命于茲新邑、紹復先王之[●]大業、底綏四方(天 其れ我が命を茲の新邑に永くし、先王の大業を紹復し、四方を底し綏んぜん)」による。晋・傅玄「宗廟歌・宣皇帝登歌」(『樂』卷8)に「經始大業、造創帝基。畏天之命、于時保之(大業を経始し、帝基を造創す。天の命を^{つし}畏み、^{こゝ}時に^{おい}于て之れを保つ)」。
- 光一あまねく満ちわたる。『尚書』益稷に「光天之下、至于海隅蒼生(天の下に^ち光ち、海隅に至るまで^{あお}蒼きもの生ず)」、その孔疏に「堯典之序、訓光爲充、即此亦爲充。言充滿大天之下也(堯典の序に、光を訓じて充と為せば、即ち此も亦た充と為す。大天の下に充滿するを言うなり)」。宋・謝莊「明堂歌・歌太祖文皇帝」(『樂』卷2)に「内靈八輔、外光四瀛(内は八輔に靈し、外は四瀛に光つ)」。
- 寰宇一天下。唐・楊師道「奉和正日臨朝應詔詩」(『初學記』卷14・禮部下・朝會所引・太宗貞觀5年(631)作)に「皇猷被寰宇、端辰屬元辰(皇猷 寰宇を^{おほ}被い、端辰 元辰に屬む)」。唐・張說「封泰山樂章・豫和六首 降神」其四(『樂』卷5・開元13年(725)作)に「承眷命、牧蒼生。寰宇謐、太階平(眷命を受け、蒼生を牧す。寰宇 謐らかにして、太階 平らかなり)」。

【訳】

先帝の恩にゆだねられ、枢機を握りて民を撫す。
 かしこき韜略えびすを鎮め、武威かがやかす天子の軍。
 みかどの風化に九州なびき、遺せし^{のり}法もて無為に治まる。
 めでたき兆しは蒼天より^ふ降り、帝業 天下に満ちわたる。

⑩ 第十

肅肅祀典、邕邕禮秩。 肅 肅たる祀典、邕邕たる礼秩。
 三獻已周、九成斯畢。 三獻 已に周くし、九成 斯に畢る。
 爰撤其俎、載遷其實。 爰に其の俎を撤し、載ち其の実を遷す。
 或昇或降、唯誠唯質。 或いは昇り或いは降り、唯だ誠たり唯だ質たり。

【校記】

- ①第十一『唐』作「十」、『全』卷10無し。②昇一『樂』『唐』『全』作「升」。
③唯一『全』卷5作「惟」。

【押韻】

入声5質（秩・畢・實・質）

【語釈】

- 肅肅/邕邕**—『毛詩』周頌「雝」に、周成王の祖靈祭祀をのべて「有來雝雝、至止肅肅（来たるもの有りて雝雝たり、至りて肅肅たり）」とあるのによる。その鄭箋に「雝雝、和也。肅肅、敬也」。祭祀の厳肅かつなごやかなさま。「邕」は、「雝」「雍」に通じる。前漢・司馬相如等「郊祀歌十九首・朱明」（『樂』卷1）に「廣大建祀、肅雍不忘（広大に祀を^{もつ}げ、肅雍として忘れず）」。晋・傅玄「宗廟歌・饗神歌二首」其二（『樂』卷8）に「肅肅在位、有來雍雍（肅肅として位に在り、来たりて雍雍たる有り）」。
- 祀典**—祭祀の典礼。『禮記』祭法に「及夫日月星辰、民所瞻仰也……非此族也、不在祀典（夫の日月星辰に及びては、民の瞻仰する所なり……此の族に非ざれば、祀典に在らず）」、その鄭箋に「祀典、謂祭祀也」。梁・沈約「宗廟登歌七首」其七（『樂』卷9）に「祀典昭潔、我禮莫違（祀典 昭らかにして潔く、我が礼 違ふこと莫し）」。
- 禮秩**—祭祀儀礼における一定の次第。「秩」は、順番どおりに秩序だてて祀ること。『尚書』洛誥に「咸秩無文（^み咸な文無きをも秩せ）」、その偽孔伝に「皆次秩不在禮文者而祀之（皆な礼文に在らざる者も次秩して之れを祀れ）」。唐・無名氏「朝日樂章・肅和 登歌奠玉帛」（『樂』卷6・太宗貞觀年間作）に「禮云克備、斯文有秩（礼 ^こ云に克く備わり、斯文 秩 有り）」。
- 三獻已周**—一句は、前の第七に見える「禮備三周」と同趣旨。その註釈を参照。「三獻」は、『禮記』禮器に「一獻質、三獻文、五獻祭、七獻神（一獻は質、三獻は文、五獻は祭、七獻は神）」、その鄭箋に「謂祭社稷五祀」とあるように、もとは社稷および五行神を祀る際の儀礼。唐代の昊天祭祀に三獻を用いるのは、後漢以来の儀注に由来するという（前掲の江川論文29頁参照）。梁・沈約「雅樂歌・禮雅二首 就埋」其二（『樂』卷3）に「八變有序、三獻已終

(八変 序 有りて、三献 已に終わる)」。唐・褚亮等「祀圓丘樂章・壽和 酌獻飲福酒」(『樂』卷4・太宗貞觀6年(632)作)に「八音斯奏、三獻畢陳(八音 斯に奏し、三獻^{ことごとつら}畢く陳ぬ)」。

○九成一音楽を9回繰りかえして演奏する。『尚書』益稷に「簫韶九成、鳳皇來儀(簫韶九成すれば、鳳皇 来たりて儀す)」、その孔疏に「成謂樂曲成也。鄭云成猶終也。每曲一終、必變更奏。故經言九成、傳言九奏、周禮謂之九變、其實一也(成は樂曲の成るを謂うなり。鄭云わく「成は猶お終のごときなり」と。曲の一たび終わる毎に、必ず変じて更に奏す。故に經に九成と言ひ、伝に九奏と言ひ、周禮に之れを九變と謂うは、其の實 一なり)」。ここでは祭祀音楽の奉奏を象徴していう。晋・荀勖「四廂樂歌・食學樂東西廂歌・嘉會」(『樂』卷13)に「禮充樂備、簫韶九成(礼 充ちて樂 備わり、簫韶 九成す)」。北齊・無名氏「元會大饗歌・皇夏 皇帝入」(『樂』卷14)に「禮終三爵、樂奏九成(礼は三爵を終え、樂は九成を奏す)」。

○撤其俎—「撤俎」は、いけにえを載せた足付きの台(俎)を壇上からさげる祭祀儀礼の次第。下句とあわせてそれを描写する。北周・庾信「宗廟歌・皇夏 皇帝還東壁飲福酒」(『樂』卷9)に「受螯撤俎、飲福移樽(螯を受けて俎を撤し、飲福して樽を移す)」。

○遷其實—「實」は「俎實」、すなわち俎に盛られたいけにえ。『禮記』樂記に「大饗之禮、尚玄酒而俎腥魚(大饗の礼は、玄酒を尚にして腥魚を俎にす)」、その鄭註に「大饗禘祭先王、以腥魚爲俎實(大饗は先王を禘祭するに、腥魚を以て俎実と爲す)」。宋・顔延之「皇太子釋奠會作詩」(『文選』卷20)に「昭事是肅、俎實非馨(昭事 是れ肅み、俎実 馨しきに非ず)」。

○或昇或降—祭祀に与る者が次第に従って祭壇に昇降する。『毛詩』小雅「楚茨」に、祖靈祭祀のさまを描写して「或剝或亨、或肆或將(或いは剝ぎ或いは亨、或いは肆ね或いは將ぐ)」というのに類した表現。梁・沈約「北郊登歌二首 皇帝初獻」其二(『樂』卷3)に「躬茲奠饗、誠交顯晦。或升或降、搖珠動佩(躬ら茲に奠饗し、誠もて顯晦に交わる。或いは升起或いは降れば、珠を揺らし佩を動かす)」。北齊・無名氏「享廟樂辭・皇夏樂 皇帝還東壁飲福酒」

（『樂』卷9）に「時洗時薦、或降或升（時に洗い時に薦め、或いは降り或いは
升る）」。

- 唯誠唯質一祭祀主宰者たる自らの誠実質朴なるさま。『禮記』郊特牲に、天子の郊祭を説いて「掃地而祭、於其質也……用犢、貴誠也（地を掃いて祭るは、其の質に於いてするなり……犢を用いるは、誠を貴ぶなり）」。北周・庾信「祀圓丘歌・昭夏 組入」（『樂』卷4）に「組奇豆偶、惟誠惟質（組は奇にして豆は偶なり、惟だ誠たり惟だ質たり）」。

【訳】

おごそかに祭りを営み、なごやかに式事はすすむ。

三たび盃たてまつり、九たび音曲かなでらる。

御饌のつくえをとり下げて、その生け贄をかたづける。

壇に昇り壇より降るに、ただまごころもてひたすらに。

①
第十一

禮終肆類、樂闋九成。	れい しるい お がく きゆうせい や 礼は肆類を終え、楽は九成を闋む。
仰惟明德、敢薦非馨。	あお た めいとく あえ ひけい すす 仰ぐは惟だ明德、敢て非馨を薦めんや。
顧慙菲奠、久駐雲輶。	かえり ひてん は ひき うんべい とど 顧みては菲奠を慙じるも、久しく雲輶を駐めんとす。
瞻荷靈澤、悚戀兼盈。	み れいたく こうむ しようれん か み 瞻ては靈沢を荷り、悚恋兼ねて盈つ。

【校記】

①第十一—『唐』作「十一」、『全』卷10無し。②駐—『全』卷5作「馳」。

【押韻】

下平14清（成・盈）、同15青（馨・輶）通押。

【註釈】

- 肆類一天帝に代わり天下を治めることを告げて祀る。『尚書』舜典の「肆類于上帝（肆に上帝に類す）」による。その孔疏に「遂行爲帝之事、而以告攝事類祭於上帝（遂に行いて帝の事を為し、而して以て摂事を告げて上帝を類祭す）」。唐・無名氏「朝日樂章・肅和 登歌奠玉帛」（『樂』卷6・太宗貞觀年間作）に「帝郊肆類、王宮戒吉（帝郊 肆に類し、王宮 吉を戒む）」。

- 樂闋九成—「闋」は、楽曲の演奏がやむ。『禮記』郊特牲に「卒爵而樂闋(爵を卒うれば樂 闋む)」、その孔疏に「公飲卒爵而樂止(公 飲んで爵を卒うれば樂 止む)」。梁・沈約「南郊登歌二首」其二(『樂』卷3)に「王既升、樂已闋(王 既に升起、樂 已に闋む)」。武后「享清廟樂章・第九撤俎」(『樂』卷10)に「登歌已闋、獻禮方周(登歌 已に闋み、獻礼 ^{はじ}めて周くす)」。また、前の第十「九成」註釈を参照。
- 明德/非馨—『尚書』君陳の「至治馨香、感于神明。黍稷非馨、明德惟馨(至治の馨香は、神明を感ぜしむ。黍稷 ^{かんば} 馨しきに非ず、明德 惟だ馨し)」による。神靈に真に通じるのは、供物の黍稷(キビの類)ではなく祭主の高き徳であることをいう、祭祀歌辭に常見の用典。その孔疏に「所言馨香感神者、黍稷飲食之氣非馨香也、明德之所遠及乃惟爲馨香爾(馨香 神を感ぜしむ)と言う所の者は、黍稷飲食の氣の馨香なるに非ざるなり、明德の遠く及ぶ所乃ち惟だ馨香を爲すのみ)」。梁・沈約「雅樂歌・誠雅三首 二郊送神」其三(『樂』卷3)に「我有明德、馨非稷黍(我に明德 有り、馨しきは稷黍に非ず)」。唐・褚亮等「享先農樂章・雍和 迎俎」(『樂』卷7・太宗貞觀年間作)に「歆我懿德、非馨稷黍(我が懿德 ^うを歆けよ、馨しきに非ざる稷黍)」。武后「大享拜洛樂章・九和 乘輿初行」(『樂』卷6・垂拱4年(688)作)に「惟憑展敬、敢薦非馨(惟だ展敬に憑り、敢て非馨を薦めんや)」。
- 雲輶—雲がとりまく天帝の車駕。「輶」は、幌つきの車。神靈が雲とともにあらわれるのは、『楚辭』や前漢「郊祀歌十九首」以来の伝統的表現であるが、先だつ詩文においてこの語は普通、神仙の乗りものとしてあらわれる。梁・沈約「赤松澗」(『藝文類聚』卷78・靈異部上・仙道所引)に「神丹在茲化、雲輶於此陟(神丹 茲に在りて化し、雲輶 此に於いて陟^{のぼ}る)」。郊廟歌辭の例では、唐・包佶「祀雨師樂章・迎神」(『樂』卷6・徳宗貞元6年(790)作)に「雲輶戾止、灑霧飄煙(雲輶 ^{いた} 戾止るに、霧を ^{そそ}灑ぎ煙 ^{ひるがえ}を飄す)」。
- 靈澤—天帝のくださる恩沢。後漢・王逸「九思・憫上」(『楚辭』)に「鬚髮薈頰兮顛鬢白、思靈澤兮一膏沐(鬚髮 薈頰して顛鬢 白く、靈沢を思いて一たび膏沐せんとす)」、その原註に「靈澤、天之膏潤也」。晋・張駿「東門行」

（『楽』巻37）に「昊天降靈澤、朝日耀華精（昊天 靈沢を降し、朝日 華精を耀かす）」。

- 悚戀**—先例の見られない語。ここでは神霊に対する畏敬と敬慕、と解した。「悚」は、おそれる。宋・殷淡「章廟樂舞歌・昭夏樂 送神」（『楽』巻8）に「戀皇靈、結深慕（皇霊を恋い、深慕を結ぶ）」。唐・無名氏「享太廟樂章・恭和撤俎」（『楽』巻10・中宗神龍元年(705)作）に「肅承靈福、悚惕兼盈（肅みて靈福を承け、悚惕 兼ねて盈つ）」。

【訳】

天のみかどに告げまつり、九たびの楽は音をやむ。
 つつしみ捧ぐは我が明德、いかでかキビをばたてまつらん。
 薄き供物に恥じいるも、ながく雲車を留めたまえ。
 仰ぎて妙なる恩を受け、畏れつつまたあがめ慕う。

①第十二

式乾路、闢天扉。	けんろ しよく てんび ひら	乾路に式せば、天扉 闢けり。
廻日馭、動雲衣。	じつぎよ めぐ うんい うご	日馭を廻らせ、雲衣を動かす。
登金闕、入紫微。	きんけつ のぼ しび い	金闕に登りて、紫微に入る。
望仙駕、 ^② 仰恩微。	せんが のぞ おんき あお	仙駕を望みて、恩微を仰ぐ。

【校記】

①第十二—『唐』作「十二」、『全』巻10無し。②仰—『楽』作「迎」。

【押韻】

上平8微（扉・衣・微・微）

【註釈】

○**式**—一車のしきみ（軾）に手をかけて敬礼する。『論語』郷黨に「凶服者式之（凶服の者には之れに式す）」、その皇侃義疏に「若在車上應爲敬時、則落手憑軾。憑軾則身俯僂、故云式之。式、軾也（若し車上に在りて応に敬を爲すべき時は、則ち手を落として軾に憑る。軾に憑れば則ち身は俯僂す、故に「之れに式す」と云う。式は軾なり）」。ここでは、天宮に帰る上帝の神霊の挙止。

唐・無名氏「五郊樂章・青郊送神」(『樂』卷6)に「送禮有章、惟神還軾(送禮章 有れば、惟れ神 還るに軾す)」。

- 乾路一神靈が帰る、天へ続く道。「乾」は、乾坤の乾で、天の意。先例に乏しい語。梁・沈約「贈沈録事江水曹二大使五章」其三(『文館詞林』卷158)に「王道無外、乾路昭亨(王道 外 無くして、乾路 昭らかに亨る)」。ただしこの例では抽象的な「乾道」「天道」の意。
- 闕天扉一天宮の門扉が開く。「天扉」のかたちでは用例に乏しい語。『楚辭』「九歌・大司命」に「廣開兮天門、紛吾乘兮玄雲(広く天門を開き、紛として吾れ玄雲に乗る)」。前漢・司馬相如等「郊祀歌十九首・天門」(『樂』卷1)に「天門開、誅蕩蕩。穆並騁、以臨饗(天門 開き、誅として蕩蕩たり。穆ととして並び騁せ、以て饗に臨む)」。晋・曹毗「黃帝贊」(『藝文類聚』卷11・帝王部1・黃帝軒轅氏所引)に「豁焉天扉闕、飄然跨騰鱗(豁焉として天扉 闕き、飄然として騰鱗に跨る)」。
- 日馭一太陽がひく車。神靈の車駕。隋・牛弘等「圜丘歌・昭夏 送神」(『樂』卷4)に「騰日馭、鼓電鞭(日馭を騰げ、電鞭を鼓す)」。
- 雲衣一雲のころも。後漢・劉向「九歎・遠逝」(『楚辭』)に「遊清靈之颯戾兮、服雲衣之披披(清靈の颯戾たるに遊ぶに、雲衣の披披たるを服す)」、その王逸註に「上遊清冥清涼之庭、被服雲氣而通神明也(上に清冥清涼の庭に遊ぶに、雲氣を被服して神明に通ずるなり)」。ここでは神靈の着衣。梁・江淹「王子喬贊」(『藝文類聚』卷78・靈異部上・仙道)に「雲衣不躑躅、龍駕何時還(雲衣 躑躅せず、龍駕 何れの時にか還る)」。
- 金闕一天帝の居所。『神異經』(『藝文類聚』卷62・居處部2・闕所引)に「東北大荒中有金闕、高百丈……中有金階西北入兩闕中、名天門(東北の大荒中に金闕 有り、高さ百丈。……中に金階の西北より兩闕の中に入る有り、天門と名づく)。ただし、道教神や神仙の宮殿を指するのが普通。王子喬を祀る、武后「昇仙太子碑序」(『全唐文』卷98・聖曆2年(699)作)に「驂鸞馭鳳、昇八景而戲仙庭。駕月乘雲、驅百靈而朝上帝。玄都迴闕、玉京爲不死之鄉。紫府旁開、金闕乃長生之地(鸞に驂り鳳を馭し、八景に昇りて仙庭に戯る。月

に駕し雲に乗り、百靈を馭りて上帝に朝す。玄都^{はる}迴かに闢き、玉京を不死の郷と為す。紫府^み旁な開き、金闕は乃ち長生の地なり」。

- 紫微一紫微宮、天帝の居所。前稿第三「太一」註釈に引く、『尚書』舜典の『經典釋文』馬融註を参照。宋・謝莊「明堂歌・迎神歌」（『楽』巻2）に「華蓋動、紫微開（華蓋 動き、紫微 開く）」。武后「享清廟樂章・第十送神」（『楽』巻10）に「莫申丹懇、空瞻紫微（丹懇を申ぶる莫く、空しく紫微を瞻る）」。
- 仙駕一神靈の乗る車駕。武后以前の郊廟歌辭で「仙」字をもって諸神・宗廟の靈を表す例は見られず、武后による他の作および中宗期以降の太子廟樂章に却ってその例が散見されることは注意される。武后「享先蠶樂章・昭慶飲福送神」（『楽』巻7・高宗頭慶年間作）に「仙壇禮既畢、神駕儼將昇（仙壇礼 既に畢り、神駕 儼として將に昇らんとす）」。武后「享清廟樂章・第十送神」（『楽』巻10）に「大禮言畢、仙衛將歸（大礼 言に畢り、仙衛 將に帰らんとす）」。唐・無名氏「享章懷太子廟樂章・第一迎神」（『楽』巻12・中宗神龍初年作）に「仙氣靄靄、靈從師師（仙氣 靄靄たり、靈從 師師たり）」。
- 恩徽一先例に乏しい語。ここでは「徽」が同音の「暉」に通ずると考え、「恩光」すなわち恩寵（ここでは天帝のそれ）の意と解した。唐・薛元超「諫蕃官仗内射生疏」（『文苑英華』巻694・高宗上元3年(676)作）に「臣曲荷恩徽、重得奉陪鑾駕（臣 曲げて恩徽を荷り、重ねて鑾駕に奉陪するを得）」。唐・沈佺期「奉和春初幸太平公主南莊應制」（『全唐詩』巻96・中宗景龍3年(709)作）に「自有神仙鳴鳳曲、併將歌舞報恩暉（自り神仙 鳴鳳の曲 有るも、併せて歌舞を將て恩暉に報ゆ）」。

【訳】

車上に軾して天路に臨めば、蒼穹の門 ここに開く。

日輪の車をめぐらせ、青雲の衣をなびかす。

かがやける宮闕に昇り、天帝の御殿に入る。

靈なるお車を望み、みかどのご恩をふり仰ぐ。

[附記] 本稿は、JSPS 科研費15K02436(課題名「神廟祭祀と唐代文学」)の助成を受けたものである。

註

- 1) 『全唐詩』 卷10は、「福」を「祉」に作る。
- 2) 『舊唐書』 卷30は、「契」を「錫」に作る。